

# 幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を

—— 巢立つ者へのねがい ——

松 隈 玲 子

前号まで四回にわたって現代の幼児教育に最も必要であると思われる「ゆとり」と「ゆめ」と「ゆたかさ」についてのべた。

時間のゆとり、目標のゆとり、心のゆとり、からだのゆとり、そしてゆめとゆたかさについての考察をすすめるうちに、これらのものは個々別々に存在するのではなく、相互にかかわりあい、もちながら育つものであること、同時にまた子どもと保育者とのかかわりの中で深められ、たかめられ、あるいは失なわれるものであることが明らかになった。

「ゆとりある保育」は保育者と自己とのかかわりかたにおいて生み出される。即ち保育者が幼児教育に対して、それ以前に一人の子どもに対してどういう教育観、世界観をもっているかということがキーポイントとなる。

ひとりの子どもとの「出会い」それが人間教育においてかけがえのない意味をもつものであることを考える時、子どもにとって最初の出会いとなる母親とのかかわりあいの大切さはいうまでも

ないが、はじめての集団教育の導き手としての保育者との出会いもまたおろそかにはできない。

以上により、表題についての論述の結びとして、保育者養成にたずさわる者の立場から時を経ずして保育の現場めざして巢立ちゆく多くの学生諸姉に対して、このような保育者になってほしいという願いの若干をのべてみたい。

。母親と共に重荷を負いあう保育者に

これは十数年前、津守真先生の講義の中で教えられたことばである。講義の内容の大半はノートを開かなければ思いおこすことが出来なくなりかけた現在においても、このことばだけは私の心の中に生きつづけ、折にふれて学生と共に「重荷を負い合う」とはどんなことかについて考えてきた。今年もまた、このことばを保育者めざして巢立つ日まじかな学生に対する唯一のはなむけのことばとしておくりたいと思っている。

「重荷を負い合う者」語るには何と美しいそして実際に行なう

にはなんと難しいことばであるうか。

巢立つ日、卒業生一人一人に「母親と共に重荷を負い合う保育者であれ」との祈りと願いをおくる時、心に深く思われることは「私自身はどうであったか」という反省である。

この学生との出会いの日から二年間、学生と私とはどういうかわりあいをしてきたか、「共に重荷を負い合った」ことが幾たびあったらうかと考えるたびに、このことばが私自身の心の痛みとなってあざやかに刻みこまれる。そしてそのたびに幾分かでも救われる思いになるのは、学生たち同士お互いの重荷を負いあい、よろこびをわかちあったその時々を思い浮べることである。

ピアノの遅れに悩む友だちの心の痛みを自分の痛みとして、放課後遅くまで練習の相手となり、卒業判定試験に合格できた日、自分のこと以上によるこんで涙を流していた学生、幼稚園実習で幼児との対応に自信をなくし気落ちした友を上げまし、何度も自分たちが幼児の役割をとって実習のリハーサルをして心の支えとなつてあげたグループ、在学中交通事故で入院した友のために講義ノートを写し、毎日説明に通いつづけた学生等々、その一つ一つを思いおこすと、こうした友だちに対する暖かい思いやり、共に重荷もよろこびもわかち合うゆたかな心情は、やがて学業や技

能の習熟をこえて子どもの心を理解し、母親と共に歩もうとする保育者となる素地をつくり出すものとなることを信じたい。

そして近い将来、幼児との出会いはその子とかかわりのある家庭も含めた出会いであり、幼児の入園は、同時にその父母の入園でもあることをしっかりとめることのできる保育者に育ってほしいと願いたい。

また担任した子どものことについて母親と話し合うとき、「この母親の重荷は何であろうか」「私はほんとうにこの母親と共に重荷を負い合っているのだろうか」とたえず自問自答し、うまく面談が成立して対話がスムーズにはこび、助言が信頼をもって受け容れられた時、「この面談は成功した」と思い、そこで相談を終了するのではなく、「相談のテクニクのみ成功ではなかったか、母親が受け容れた私の助言は、ほんとうに子どもの立場を中心に、子どもの幸せをねがって、しかも母親の立場を理解し悩みに共感した上での助言であったらうか」と常に自分を省み、その場かぎりの助言、面談でなく、出会いの日から卒園の日まで、あるいは卒園の後までもその子と母のことを思いつづける保育者であつてほしい。

。子どもと共感できる保育者に  
子どもと共感できるということは、子どもをよく知り、子ども

の立場にたてるといふことに他ならない。

「先生おはようございます」という一斉に揃って言えた朝のあいさつの調子よさを大切に思うのではなく、今朝登園した子が帰園の時まで、どういう人や物とのかかわりあいをむすんでいくか、「めだつ状況をになう子」「めだたない状況をになえる子」それぞれの特徴をもつ子どもたち一人一人が思ったこと、願ったこと、感じたこと、行なったことの一つ一つをその子の立場にたつてうけとめることを大切に思う保育者でありたい。

経験による保育の流れや、集団の統一の中に安定を計ろうとするのではなく、個々の子どもの小さな成長の節をみのがさず、共

はじめてつみ木が高くつめた時、友だちよりもかなりおくれれても一生懸命とりくんだ工作ができた時、ブランコが高くこげた時、いつも登園の遅い子が始めて早くきた時、苦心の末、砂場のトンネルが開通した時、それぞれに子ども心にあふれるよろこびを自分のものとしてうけとめよろこびをわかちあえるものとなること、このことが、いわゆる見ばえのする保育を行なうものとなることよりも価値あることに気付いてほしい。

。めぐみを伝える保育者に

「恵みの中にある自分」をはっきり認識し、ありがたいと思ひ、

感謝の心を育てる保育者であってほしい。

「神のめぐみ」「仏のめぐみ」あるいは「自然のめぐみ」それぞれのうけとめ方があろうが、私が健康に生かされているそのことに對しても、私にかかわる数限りないめぐみをぬきにしては考えることができない。

人間のからだのしくみの何にもくらべようのない精巧さ、動物や昆虫の種族保存のための本能の不思議さ、生態系の神秘さ、そして水の循環、自然界の法則と秩序など、どの一つをとりあげてみても人知ではとうてい計り知ることのできない思いにみたまされる。

人間が生きていくのはあたり前であり、生きるためにできるだけ便利なようにまわりのしくみを変えていこうと考える前に、特に幼児期においては、めぐみを教え、めぐみに感謝することのできる人間性をしっかりと育てるものでありたい。

。物にきびしく、人にやさしい保育者に

我々はともすれば人にきびしく、物に対しては安易な妥協をすることが多い。努力すればできる能力のある子が、その場かぎりの発言をしたり、製作物をつくってきた時「仕方ないけどいいことにしてあげましょう」というのはほんとうの愛情とは言えない。もちろんなぜ充分能力が発揮できなかったか、その子にどう

いう力（例えば早く遊びたいなど）が働いたかを知ることの大切さは言うまでもないが、その子自身も満足のいくものと思っていなようなものを保育者がみとめたり、ほめたりすることに安易であってはならない。むしろこのことを通して保育者と子どもとがより近くなり、共に考え、はげましもう一度やり直そうとする意欲を育てることにより、その子の能力を充分に発揮したのものとなった時、その努力と発言や作品のたしかさを適切にほめるものでありたい。しかし、最初の時点で、そのことができなかったからといって、その子全体がだめな子であるという人に対する評価を行なうことがあってはならないと考える。

食品公害はもとより、真に子どもの立場にたつて製作したとは思われない文化財、遊具、玩具、衣服、TV番組、絵本雑誌などのはんらんする現在、保育者は子どもに与える「もの」をえらぶたしかな目と、外観や、便利さにまどわされないきびしい心をもつものでありたい。

慎重に吟味して遊具を購入し、その用途については、子どもにも危険性のない限り、子どもの自主性と創造性を主にして考えることが大切であり、安易に購入した遊具に対して、やたらに規制のみ多い用い方を子どもに強いることのないように心がけたい。

。よいと思つたことを子どもの前で明らかにしていく保育者に

保育者は子どもとの日々のかかわりの中で子どもから多くのものを学んでいく。子どもによって気付かされ、子どもに教えられたことを子どもに明らかに示したい。そのことによって子どもは幼児教育の大切さを自分自身のものとして育つことができる。

子どもがこうだから苦労した、こんなことをして困つたというのではなく、その時に自分は子どもとのかかわりの中でこんなことに気付いた。子どもにはこういう分がありもつともだと思つた、そしてその際にここが一番大切だと思つたということを明らかにしていきたい。

紙面の都合上意をつくせないが、幼児教育論として第一稿をふみ出したものの、論じていくうちに、幼児教育者論としての思いをつらねてきた。

幼児教育はその教育をする人の問題にかかわる面が大きく、幼児教育にたずさわる者はいかにあるべきかを考えることも意義あることと思われる。幼児教育者、それ以前に人間としていかにあるべきかを省みるとき、これまでのべてきた幼児教育における「ゆめ」と「ゆとり」と「ゆたかさ」の教育論が、何らかのプラスとなつていかされることがあればとねがいこの稿をとじた

い。  
(おわり)

(西南女学院短期大学)